

## 巻頭言『改めて多様性と共生の難しさ』

共生社会文化研究所長 福島 哲夫

この紀要もやっと第2号の発刊を果たすこととなった。

共生社会文化研究所の設立の発案から、設立準備ワーキンググループのリーダーを務めさせていただいた私としてとても感慨深いものがある。そして何よりここまでご尽力いただいた関係各位に心よりの感謝の言葉を伝えたい。

私がかねてより、「共生の難しさ」や「多様性を認めることの難しさ」を折に触れて書いてきたが、それは今も変わらぬ一貫した思いである。最近、以下のような文章を目にした。

\*\*\*\*\*

多様性、という言葉が生んだものの一つに、おめでたさ、があると感じています。

自分と違う存在を認めよう。他人と違う自分でも胸を張ろう。自分らしさに対して堂々としていよう。生まれ持ったものでジャッジされるなんておかしい。

清々しいほどのおめでたさでキラキラしている言葉です。これらは結局、マイノリティの中のマジョリティにしか当てはまらない言葉であり、話者が想像しうる「自分と違う」にしか向けられていない言葉です。

想像を絶するほど理解しがたい、直視できないほど嫌悪感を抱き距離を置きたいと感じるものには、しっかり蓋をする。そんな人たちがよく使う言葉たちです。」朝井リョウ「正欲」（新潮文庫）より

\*\*\*\*\*

たしかに、そのとおりである。私たちは想像を超えたものの多様性を認めて共生することなどできない。

思えば、昨年末のNHK紅白歌合戦のテーマは「ボーダレス」だった。その成果はともかく、意図だけは汲みたい。けれども、つい最近明らかになったある政党のとある県での会合に「露出の多い女性ダンサー」を招いたのが「タイバーシティ」をテーマとしたものだったとの言い訳に至っては、いよいよこの言葉が、ここまで安易に使われることがあるという最たる例になってしまっていて、もはや言葉はない。

世界に目を転じれば、ロシアとウクライナ、パレスチナにおける虐殺、そしてアメリカ政治の分断、東アジアにおける危うい状況等々、どれをあげても「多様性」と「共生」の危機ばかりである。

上記のような言説や現実を直視しながら、私たちは常に「多様性」と「共生」ということの難しさと、これらの言葉が持つ危うさに取り組んでいくしかないだろう。

そして、この紀要はそのような取り組みのとても小さいけれども地道な営みの積み重ねだと言いたい。そして、営みと歩みは小さなものではあるけれど、視野だけはマクロからミクロまで、表面からできるだけ深いところまで達したものでありたい。

